中近世における宗教運動と
メディア・世界認識・社会統合

文部科学省 科学研究費助成事業
学術変革領域研究(B)2020〜2022年度

ReMo(リモ)研 ニューズレター

03

2024.03

文部科学省 科学研究費助成事業
学術変革領域研究(B)2020〜2022年度

中近世における宗教運動と
メディア・世界認識・社会統合

ReMo研 ニューズレター

2024.03 03

contents

目次・巻頭言 …… 1
領域概要・研究組織 …… 3
2023年度の活動 …… 5
受賞報告 …… 13
最終成果刊行のお知らせ …… 14
最終成果報告 …… 15
2023年度業績一覧 …… 16

巻頭言

このたびは、学術変革領域研究（B）「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合：歴史研究の総合的アプローチ」（ReMo研）のニューズレター第3号を手に取ってくださりまことにありがとうございます。ReMo研のコンセプトと活動をわかりやすく伝えるためにニューズレターを作成してきましたが、本号で最後になります。以下お目通しいただき、感想・意見をお寄せいただければ幸いです。

本プロジェクトは、中近世の修道士、仏僧、神職がその宗教性に根ざす形で創出・活用したメディアの特質について、文化圏横断型の比較研究をすることに主眼があります。この3年半で扱ってきたメディアは、修道戒律、説教、文学作品などのテキストから、彩飾写本や聖堂装飾などの図像、そして巡礼などの仕組みに至るまで非常に多岐に渡りますが、宗教者はいずれも神（ないし神的なもの）の超越性に強く魅了され、その抗いがたい力に導かれるようにしてそうした有形・無形のメディアを創出し、人々に発信していました。そこで創造性の源泉になっていたのは、あらゆる宗教活動を基礎づけていた聖典――キリスト教でいえば聖書（旧約、新約）、仏教でいえば経典――です。これら聖典が誕生したのはいずれもユーラシア大陸のより中央に近い地域（中近東、インド）ですが、これがそれぞれ大陸の東西両端の辺境の地にもたらされ、そこで独自の解釈が施され、（西洋史の時代区分である）中世期に爆発的なメディア創造が起こりました。聖典が外からやってきた「異物」であることに深い意味を見出しながら、この文化現象を総体的にとらえる必要があります。この認識から本プロジェクトの日欧比較というアプローチが導かれ、多くの成果が実を結んでいきました。

本プロジェクトは2020年10月に始動しました。本来であれば2023年3月に終了する予定でしたが、この2年半はちょうどコロナ禍の最中であり、当初立てていた計画の多くをやり残していました。そのため予算を2023年度に繰越し、1年間プロジェクトを延長することにいたしました。前号のニューズレターで「国際シンポジウムの開催、そして英語および日本語での論文集の刊行に取り組む」と宣言しましたが、これを執筆している2024年3月上旬現在、それらはすべて達成される見通しとなっています。それもこれも、プロジェクトにメンバーとして、あるいはゲストとして参画してくださった研究者のみなさんのご尽力あってのことです。

この場を借りて厚くお礼申し上げます。

しかし、このような壮大なプロジェクトを3年程度で完遂することは不可能です。申請段階では思ってもみなかったコロナ禍の襲来。私たちはそれでも、「学術変革領域研究」という、科研費としてやけに「クセのある」種目のコンセプトを頭の片隅におきつつ、プロジェクトとして何か残さねばと相談に相談を重ねてやって参りました。このニューズレターには、そうした苦悩の痕跡を余すことなく掲載しています。以下の記事をご覧になり、そのうえで巻末に掲載したメンバーの成果物を直接手に取っていただけたら、これに勝る幸福はありません。

本プロジェクトはこれで終わりますが、まだ第一幕の幕が降りたにすぎません。助成期間中に協力してくださった方々とともに、また新たな体制を構築して次に進んでいければと思っています。

エルベ川沿いの丘陵地帯「ザクセンのスイス」にて

中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合
領域代表

東京都立大学 人文社会学部

大貫 俊夫

領域概要

領域について

本プロジェクトは、中世・近世のヨーロッパ、アメリカ大陸、日本におけるキリスト教修道制、そして中世日本の寺社を研究対象とし、修道士、仏僧および神職がメディアを創出・活用し、文化・思想的な革新運動を展開したことについて、文化圏横断型の比較研究をするものである。

歴史学とその隣接諸分野の成果を見渡すと、修道士たちは修道戒律、説教などの文書のほか、文学作品、彩飾写本、聖堂装飾、あるいは巡礼などの仕組みも含め、多種多様な形態のメディアを駆使して自らの宗教理念を発信していたことが分かる。しかし、こうした努力がいかに社会を統合・規律化し、あるいはまた社会に持続性と弾力性を与えてきたかについては、より体系的な研究が求められる。

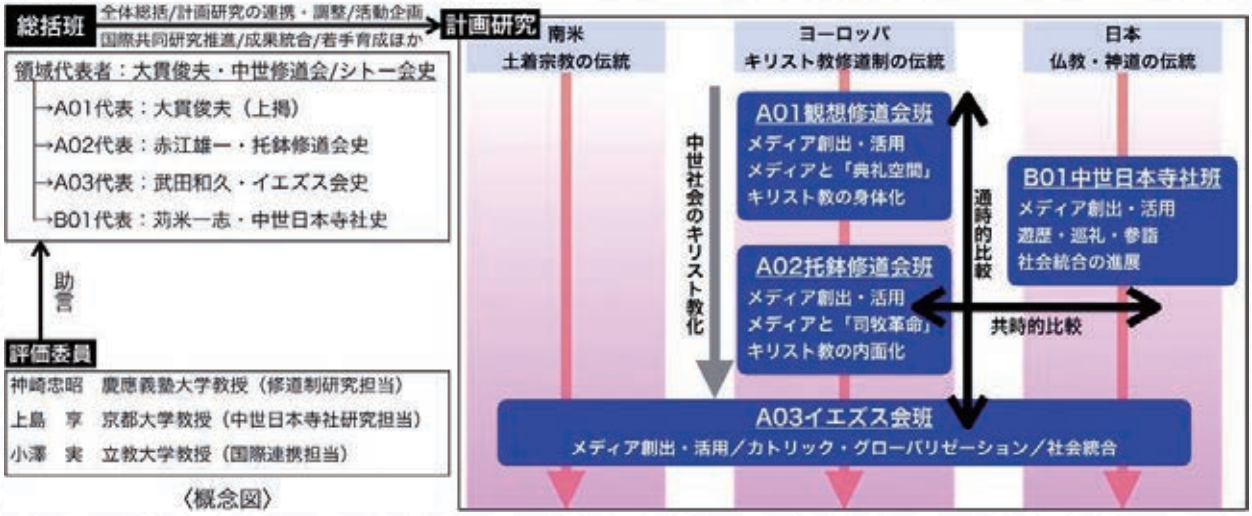
修道士や仏僧および神職は、宗教的超越を指向しつつ、司牧／教化を通じた社会変革への意思と行動力によって多種多様なメディアを創造し、社会に対して革新的な世界認識と仕組みをもたらし、社会の持続的発展に貢献したのではないか。こうした現象を異なる宗教文化のあいだで共時的・通時的に比較することで、各々の個性がきわだち、より広い視野から宗教運動と当該社会とのあいだのダイナミックな影響関係が明らかになるのではないか。本研究領域は、この観点を4つの計画研究班で共有し、各計画研究班は以下の3つの目的を達成して宗教運動の文明史的な意義を体系的に明らかにする。

1. 中近世において宗教運動を先導した人々は、宗教共同体の内外でコミュニケーションを促進するために、いかなるメディア（媒介物=文字テクスト、図像、仕組みなど）を創出し普及させたのかを明らかにする。
2. 宗教者は、1. のメディアを通じてどのような言説を宗教共同体の内外に向けて発信し、またどのような価値観と世界認識の仕方を新たにもたらしたのかを明らかにする。
3. そして最後に、宗教者は1. と2. を通していかに社会の教化を推進し、社会を統合し、文明に変動をもたらしたのかを明らかにする。

本研究領域は、単なる比較宗教史研究の延長ではない。宗教運動が世俗社会と緊張関係を持ちつつ、その持続的発展にどのように関わっていたのか、というより大きな枠組みにアプローチするものである。こうした取組みにより、宗教運動を社会のなかで実践・継承される英知ととらえ直し、その文明史的意義を総合的に明らかにする、そうした新しい学術領域を開拓したいと考えている。

「楽園に導くドミニコ会修道士たち」フィレンツェ、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院回廊スペイン人大礼拝堂壁画、14世紀

研究組織



〈概念図〉

研究班メンバーリスト

A01 観想修道会班

研究代表者

大貫 俊夫（東京都立大学大学院人文科学研究科・准教授）

研究分担者

菊地 重仁（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）
金沢 百枝（多摩美術大学美術学部・教授）
安藤 さやか（東京藝術大学大学院美術研究科・専門研究員）
山本　潤（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）

研究協力者

片山 幹生（大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター・研究員）
北舘 佳史（中央大学文学部・兼任講師）
林　賢治（アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク・博士課程）
三浦 麻美（東洋大学人間科学総合研究所・客員研究員）

A02 托鉢修道会班

研究代表者

赤江 雄一（慶應義塾大学文学部・教授）

研究分担者

梶原 洋一（京都産業大学文化学部・准教授）
原　基晶（東海大学文化社会学部・准教授）
駒田 亜紀子（実践女子大学文学部・教授）
荒木 文果（慶應義塾大学理工学部・准教授）

研究協力者

白川 太郎（早稲田大学助手）

A03 イエズス会班

研究代表者

武田 和久（明治大学政治経済学部・准教授）

研究分担者

折井 善果（慶應義塾大学法学部・教授）
平岡 隆二（京都大学人文科学研究所・准教授）
浅野 ひとみ（長崎純心大学人文学部・教授）
パトリック・シュウェマー（武蔵大学人文学部・准教授）

研究協力者

石川 博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授）
岡田 正彦（天理大学人間学部・教授）
小俣ラポー日登美（京都大学白眉センター／人文科学研究所・白眉特定准教授）
アンドレス・メナチェ（京都大学大学院）

B01 日本中世寺社班

研究代表者

苅米 一志（就実大学人文科学部・教授）

研究分担者

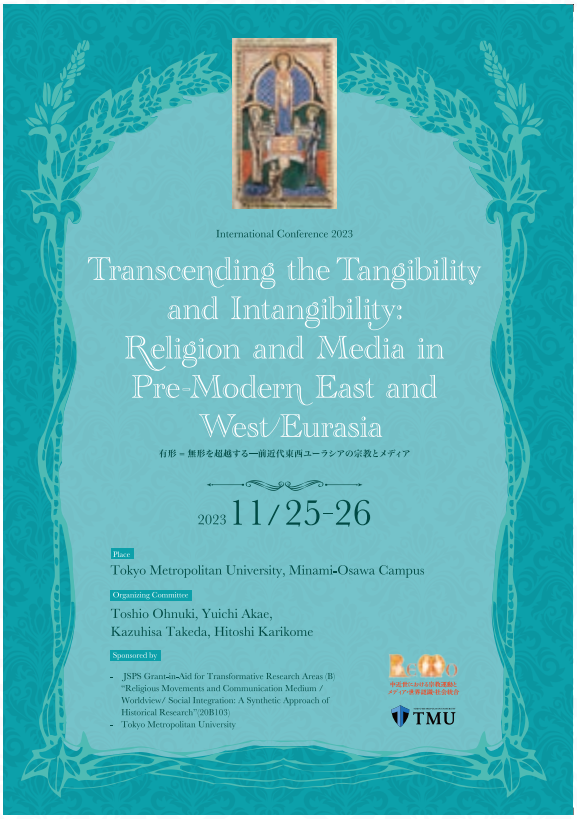
川崎 剛志（就実大学人文科学部・教授）
佐々木 守俊（清泉女子大学文学部・教授）
守田 逸人（香川大学教育学部・教授）
服部 光真（元興寺文化財研究所・研究員）
小林　郁（皇學館大学研究開発推進センター・助教）

研究協力者

藤本　誠（慶應義塾大学文学部・准教授）
湯浅 治久（専修大学文学部・教授）
上野　進（徳島文理大学文学部・教授）
鎌倉 佐保（東京都立大学大学院人文科学研究科・教授）
千枝 大志（同朋大学仏教文化研究所・客員所員）

国際カンファレンスTranscending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia（有形=無形を超越する―前近代東西ユーラシアの宗教とメディア）を振り返って

大貫 俊夫（観想修道会班）



2023年11月25日、26日の2日間、東京都立大学南大沢キャンパスの国際交流会館大会議室にて国際カンファレンスを開催した。本学術集会は、前近代（中世、近世）の宗教者が生み出した諸メディア、すなわち修道戒律、説教、文学作品、彩飾写本、聖堂装飾、あるいは儀礼や巡礼の仕組み等に焦点を当て、その成立・伝承・意義を比較史的手法により明らかにするものである。メディア史はイニス『メディアの文明史』やマクルーハン『グーテンベルクの銀河系』が古典としてよく知られるが、そこでは近代以前、メディアと宗教が切っても切れない関係にあったことへの踏み込みが十分ではなかった。宗教的動機から生み出されたメディアの革新性は、時代・地域が違えども普遍的に観察され、一文化圏を超えた文明史的意義が想定されよう。そこで特に注目したいのが、中近世のメディアが持つ有形性（tangibility）と無形性（intangibility）という二つの性質である。ReMo研のこれまでの研究活動により、これらが近代以降とは異なる形で混在しながら時代時代の宗教観、世界認識、地域秩序の成立に強い影響を与えていたことがわかってきた。そこで本学術集会では、メディアの有形性と無形性をメインテーマとして、前近代のキリスト教修道制と日本の仏教・神道を比較することで互いの共通点・相違点を明らかにすることを試みた。本学術集会は、今後の展開を計画しているユーラシア東西（ヨーロッパ、日本）およびアメリカ大陸の前近代宗教文化の創造性に関する国際共同研究の第一歩であり、またそのためのブーストとして位置付けられる。

本学術集会は5つのセッションからなり、ベルギー・ヘント大学のスティーヴン・ファンダープッテン教授、イギリス・リーズ大学のエミリア・ヤムロズィアク教授、そして東京大学史料編纂所の菊地大樹教授によるキーノートスピーチを軸に、合計13の研究報告と1つのラウンドテーブルによって構成された。プログラムは以下の通りである。

スティーヴン・ファンダープッテン（ヘント大学）

菊地 大樹（東京大学）

プログラム概要

11月25日（土）

Session 1: Founding legends as media between tangibility and intangibility

創建神話（縁起）は、修道院や寺社の起源を語り継ぐだけでなく、宗教施設の存在価値を高め、さまざまな思想を地域全体に広げていった。本セッションでは、宗教施設と周辺社会との結びつきを強め、宗教施設が組み込まれている社会秩序・宗教秩序を形成するための重要なメディアとしての創建伝説（縁起）について考察する。

Chair: Toshio Ohnuki 大貫俊夫（Tokyo Metropolitan University）

1. Keynote Steven Vanderputten（Ghent University）
   Monastic Foundation Accounts: Narratives of Identity and Distinction around the Turn of the First Millennium
2. Yoshifumi Kitadate 北舘佳史（Chuo University）
   Obazine and its Local Relationships in the Life of Saint Stephen
3. Satomi Yamamoto 山本聡美（Waseda University）
   The Age of the Warrior, its Darkness and Brilliance: Buddhist Narrative Paintings of 12th century Japan

Discussant: Yoichi Kajiwara 梶原洋一（Kyoto Sangyo University）

Session 2: Sectarian identity and media

キリスト教修道制も仏教も宗派を形成し、それぞれメディアを駆使して自他の区別を行ってきたが、前近代における宗派アイデンティティは複線的で、単純な線引きは困難である。本セッションではそのような宗派アイデンティティの特徴と「自己理解―他者理解」の対照、それを表現するメディアについて検討する。

Chair: Masahiko Okada 岡田正彦（Tenri University）

1. Momo Kanazawa 金沢百枝（Tama Art University）
   The Sculptural Decorations in the Cistercian Cloisters: Iconoclasm or Classicism?
2. Kazuhisa Takeda 武田和久（Meiji University）
   The Constitutions of the Society of Jesus: A Collective Entity of the Multifaceted Monastic Identity
3. Soichiro Ota 大田壮一郎（Ritsumeikan University）
   The Relationship between Political Power and Sects in Medieval Japan: Focusing on Sectarian Disputes *Shuron*（宗論）

Discussant: Toshio Ohnuki 大貫俊夫（Tokyo Metropolitan University）

Session 3: Constructing religious networks and media I

宗教施設は中央と地方、地方と地方を結びつけるネットワークを構築し、巡礼などの仕組みを通じてそれを社会に還元した。本セッションではそのようなネットワーク構築とメディアの関係を検討する。

Chair: Yoshimi Orii 折井善果 (Keio University)

1.Makoto Fujimoto 藤本誠 (Keio University)
Statues and Sermons in the Local Community: Media Used by Buddhist Priests from the Capital in Ancient Japan
2.Kaoru Kobayashi 小林郁 (Kogakkan University)
Ise Shrine and *Onshi* (御師) in Japanese Medieval Period
3.Shigeto Kikuchi 菊地重仁 (University of Tokyo)
Expected and Unexpected Network-Building: Translations of Relics and Their Resonance in the Frankish World

Discussant: Xiaolong Huang 黄霄龍 (University of Tokyo)

11月26日 (日)

Session 4: Constructing religious networks and media II

Chair: Hitoshi Karikome 苅米一志 (Shujitsu University)

1. Keynote Emilia Jamroziak (University of Leeds)
Cistercians as a Network: Monastic Identity and the Transfer of Objects
2.Asami Miura 三浦麻美 (Chuo University)
A Medium for a Developing Network? Elisabethkirche and the Teutonic Order, 1235–1309
3.Hitomi Omata Rappo 小俣ラポー日登美 (Kyoto University)
Mining for Gold in the Textual Vein: A Text Mining Analysis of the Intertextuality between the *Legenda Aurea* and the Martyrologies of the Reformative Era

Discussant: Patrick Schwemmer (Musashi University)

エミリア・ヤムロズィアク (リーズ大学)

Session 5: Transcending terminology and grasping concepts

ユーラシア大陸の中央部で成立したキリスト教と仏教は、古代末期～中世初期にかけて大陸の周縁部であるヨーロッパと日本に伝わり、そこで独自の発展を遂げていった。それぞれについて欧語、日本語で研究が閉鎖的に行われてきた経緯があり、同種の概念でもそれぞれの学術体系の中で異なる位置付けをなされ、これが相互理解の妨げとなっている。そこで本セッションでは、中世日本の仏教用語／概念に関する講演を行い、それを受けて中世ヨーロッパのキリスト教用語／概念との比較に関するラウンドテーブルを行う。

Chair: Yuichi Akae 赤江雄一（Keio University）

1. Keynote Hiroki Kikuchi 菊地大樹（University of Tokyo）
   Monk or Priest?: Agency, Activities and Material Culture in the Medieval Buddhist Society
2. Round Table: Hiroki Kikuchi, Steven Vanderputten, Emilia Jamroziak

5つのセッションが掲げたテーマは、大きく「創建神話（縁起）」、「宗派アイデンティティ」、「宗教ネットワーク」である。これら3つの概念はいずれも無形的でありつつ有形メディアによって表現され、更新されてゆく。いずれの報告も、そうした歴史的な諸現象のダイナミズムを大いに感じさせるものであった。さらに、セッション5では「用語を乗り越え、概念を把握する」と題して、修道士（monk）という概念の射程や、仏僧をmonkと表現することの歴史的経緯とその問題点について、会場からの意見も拾いながら尽きない議論が交わされた。

前近代の宗教メディアに関する日欧比較史研究は、検討すべき論点をまだまだ多く残していると考える。今後、ReMo研の枠組みをうまく活用しながら研究者間の交流を続けていくことが肝要であろう。

本学術集会は東京都立大学の「学術集会等開催支援」の助成も受けて実現したものである。関係者各位に厚くお礼申し上げたい。

国際中世学会2023でのセッション報告

武田 和久（イエズス会班）

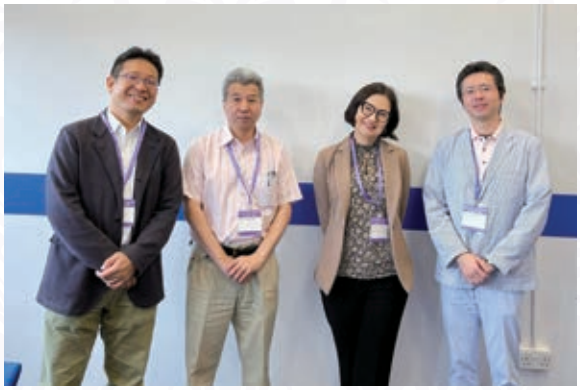
ReMo研では昨年度に引き続き、本年度もイギリス・リーズで開催された国際中世学会（International Medieval Congress 2023）においてセッション報告を行った。発表者は観想修道会班の大貫俊夫、イエズス会班の武田和久、日本中世寺社班の苅米一志の3人である。リーズ大学のエミリア・ヤムロズィアク（Emilia Jamroziak）教授には司会に加えて3人の発表に対するコメントをお願いした。

ReMo研が2023年度もセッションをエントリーしたのは、同年度の全体テーマが「ネットワークともつれ」（Networks & Entanglements）だったからである。「もつれ」は我々ReMo研関係者が2022年度の主な活動として計画・実施したワークショップ「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」のテーマに他ならず（詳細はReMo研ニューズレター第2号、2023年3月発行を参照）、ワークショップで展開された議論をさらに発展できないかという考えから、上記3人の間でアイデアを練り、大貫を代表者としてセッションを出すことになった。

本学会で出したセッションのタイトルは、「もつれ」という概念やラテン・キリスト教と日本仏教との比較というReMo研の活動趣旨を十分に意識して「'Entangled' Monasticism in Medieval and Early Modern Christianity: A Comparison with Medieval Japanese Buddhism」とし、最終日の7月6日（木）の午前に行われた。セッションと各報告の概要は次の通りである。

Session Number: 1516, 'Entangled' Monasticism in Medieval and Early Modern Christianity: A Comparison with Medieval Japanese Buddhism (Thursday 6 July 2023, 09.00-10.30)

This session will attempt to understand the history of



Christian monasticism not based on the developmental model, but as an 'entangled' history of interactions across the periods and forms of monasticism. Comparing the Cistercians and the Jesuits with special reference to the Buddhist sects in medieval Japan, the process of self-transformation through the contact with ordinary people, influenced by the monastic norms inherited from the past, will be analysed.

大貫 俊夫（観想修道会班）：
Entanglements and Self-Transformation: The Case of Cistercian Pastoral Care

本報告では、まず自身がベネディクト修道士でもあるデイヴィッド・ノウルズが『小創建史』（Exortium parvum）を歴史証言として素朴に捉え、アイデンティティの理解のために3本の補助線を引いたことの問題点を指摘した。その上で『大創建史』に基づいて教義・典礼を十全に理解できない修道士が現れたことに注目し、その原因を12世紀末に達成されたシトー会の「大衆化」（popularization）に求めた。結論として、12世紀を通してシトー会は修道制の伝統を複線的に受容しつつ（縦糸）、同時代の政治・社会・経済環境の影響を受け（横糸）、縦糸と横糸の「もつれ」の中に修道会アイデンティティが構築されたことを指摘した。

武田 和久（イエズス会班）：
A Reconsideration of Jesuit Modernity from the Entangled Perspective

イエズス会が1599年に完成させた『学事規定』（Ratio Studiorum）では生徒を10人単位にグループ化し、その10人の中から特に優秀な生徒を班長に抜擢して他の9人の勉

学の進展度合いを監督させたり、生徒と教師との間に立つ助教的な役割を班長に担わせたりするという教育メソッドが明文化された。検討の結果、これはイエズス会独自の発案というよりも、古代から中世にかけてのヨーロッパで展開された修道制の歴史の中に類似のグルーピングのやり方が認められること、またイエズス会が活動した近世という同時代的視点から見た時、プロテスタント諸派の学校教育にも類似のやり方が認められることを踏まえ、時空や宗派を超えた教育メソッドの遍在的状況が存在したことを指摘した。

苅米 一志（日本中世寺社班）：
Entanglements in the Buddhism of Medieval Japan: Sects, Doctrines, and Pastoral Care

日本仏教における「宗」の語義について、「学問分野」から「排他的な教学あるいは寺院勢力」へと変遷していく過程について考察した。8世紀において六つの「宗」が成立（南

都六宗）していたが、「学問の専攻分野」という意味合いで使用され、僧侶は複数の「宗」を学ぶことが一般的であった。9世紀における真言・天台宗の成立、天台宗における独立した出家施設（大乗戒壇）の成立を経て、国家から特定の寺院が専攻者の人数把握を認可されたことで、「宗」は寺院勢力そのものをも意味するようになった。特に排他的な意味合いを強めるのは12世紀の半ばであり、その要因は末寺の獲得など寺院間の現実的利害の対立にある。寺院は偽書をも作成して、「宗（寺院特有の教理）」が過去に勅許を受け、また国家から優劣の序列付けが行われたかのような論理操作を行ったと指摘した。

会場はリーズ大学構内のMaurice Keyworth Buildingという近代的な建物で、セミナー形式の授業に適した小規模かつこぢんまりした教室を舞台に活発な議論が展開された。前年に続いてやはり来場者の関心を集めたのは日本中世仏教

を扱った苅米報告だった。後代の歴史叙述の影響の下、日本仏教における「宗」の概念が「専門の学問分野」から「排他的な宗派」へと変質していく過程は西洋における apocryphal literature（著者や典拠の疑わしい、偽りの、正典として認められない文献）の誕生、そしてこの種の文献が高い影響力を持ちながら流布していくという問題と通じるものがあるという指摘など、東西ユーラシア大陸の両端で拡大・発展してきたキリスト教と仏教を比較する意義を再確認した。

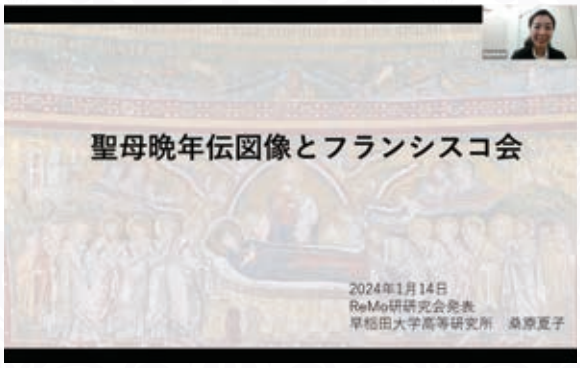
会期中は連日天気もよく、大規模な書籍の展示・販売会場の設置や中世ヨーロッパにちなんだ様々な催し物など、来場者の知的好奇心を刺激し心を和ませてくれる場面が幾つもあった。中世という時代を必ずしも専門としない者にも開かれた学会であり、様々なバックグラウンドを持つ参加者の横断的交流を可能にさせてくれる場がリーズだったというのが、参加を振り返って思うことである。初日のキーノート・レクチャーの会場にて、久しぶりだったのか、あるいは偶然だったのか、知り合い同士が顔を合わせて満面の笑顔で話し続ける姿を見られるのも、数年のコロナ禍を経て今なお開催し続けてくれている本学会あってのことだと、彼らの傍らに座りながらしみじみ実感した。

2023年度の活動

ReMo研合同研究会2023
桑原 夏子（早稲田大学高等研究所）
「聖母晩年伝図像とフランシスコ会」

2024年1月14日（日）　観想修道会班と托鉢修道会班による合同研究会　慶應義塾大学日吉キャンパス

聖母晩年伝は5世紀から15世紀にかけて地中海圏の重要な聖堂を飾ってきた画題群である。しかし聖書には聖母の晩年についての記述がなく、そのため5-7世紀にかけて複数の偽書が作成された。それらの偽書が各地で受容されたことにより聖母の晩年についての複数の「信仰的真実」が並立し、無数の図像が生み出されたのである。拙著『聖母の晩年――中世・ルネサンス期イタリアにおける図像の系譜』は同画題群の図像について、その生成から発展の系譜と受容の問題を初めて体系的に概観したものである。本発表はフランシスコ会士が注文した作例、あるいはフランシスコ会士が主たる観者だった作例を抽出し、フランシスコ会において聖母晩年伝がどのように表象・受容されてきたのかを分析した。まずはアッシジのサン・フランチェスコ聖堂内陣画、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂内陣画を取り上げ、そこに見られる新奇な図像が複数の偽書の内容を継ぎ接ぎしたものであることを明らかにし、フランシスコ会内部において偽書研究がなされていた可能性をあぶり出した。また、ピサのサン・フランチェスコ聖堂サルディ礼拝堂壁画とグッビオのサン・フランチェスコ聖堂壁画の聖母伝を取り上げ、それらが女性の宗教実践としての「瞑想による聖者との合一化」に用いられていた可能性を提示した。



各班研究会

観想修道会班研究会

●第1回　2023年9月26日（火）　Zoomオンライン

林 賢治「アウグスティヌス律修参事会員のためのベネディクト会系慣習律の受容：ザルツブルク1488番写本の死の儀式に関するテクストの分析」

ザルツブルクにおいて12世紀に製作され、現在ウィーン国立図書館に所蔵されている1488番の写本には、アウグスティヌス律修参事会員向けの規則集が含まれている。この写本は、12世紀半ばまでザルツブルクにおいて活動した後、シュタイヤーマルク州のアウグスティヌス律修参事会修道院セッカウで書物係を務めたベルンハルトという参事会員により筆記された。この写本には、参事会修道院における死の儀式に関する慣習律テクストが収録されている。12世紀の書物係は、修道院における死の儀式において中心的な役割を果たし、時には必要なテクストの編纂及び生成にも関わった。本報告では、ベルンハルトがアウグスティヌス律修参事会員たちに向けて、死の儀式に関するテクストを編纂し、その基盤としてベネディクト会系修道院用に書かれた慣習律テクストを参照した可能性を検討した。

イエズス会班研究会

●第1回　2023年8月1日（火）　Zoomオンライン

武田 和久「A Reconsideration of Jesuit Modernity from the Entangled Perspective」

本報告では7月上旬に英国リーズで開催された国際中世学会で行った報告に関わる重要な論点を概略的に紹介した。詳細は本誌「国際中世学会2023でのセッション報告」を参照。

●第2回　2023年10月2日（月）　Zoomオンライン

パトリック・シュウェマー「キリシタン聖人伝「サンタマリナの御作業」におけるローカリゼーションと口頭伝承：ポルトガル語原典に照らして」

計53話伝わるキリシタン聖人伝のそれぞれの欧文原典は発表者によって明らかにされている（『キリシタン文化研究会会報』159–160号）。本発表では聖マリナ伝を取り上げて原典と諸本の異同を確認した。この聖人伝は宣教師の説教手引きバレト写本（ローマ字、1591年写、ヴァチカン図書館蔵）そして隠れキリシタンの秘書『耶蘇教叢書』（国字、1790年代没収、以後書写、東京大学総合図書館蔵）という2写本が現存する。原典はトリエント公会議以後に出版された最初の俗語聖人伝集ディオゴ・ド=ロザリオ編『聖人の物語』（葡語、1567年）だけである。マリナ伝は民衆ウケの良いらしい男装聖女物語の一つで、主人公が街の女性を妊娠させたという冤罪をかけられて無言で苦しみ、死ぬとその正当性が証明されるという内容となっている。トリエント公会議の精神に合わせて聖人伝集を抜本的に改革したはずだった原典の編者ド=ロザリオが、まだまだ中世大衆向けのネタを残している代表例でもある。一方、『耶蘇教叢書』所収の

聖人伝3点のうち2点がこのような男装聖女伝だということを考えると、秘密を抱えたり不当に不審がられたりするというのは隠れキリシタンにとって珍しい見世物ではなく身近な話であったということが窺える。本発表では原典、バレト写本、浦上没収本の有意味な異同を網羅的に収集し、分類した。その結果、三種類が浮き彫りになった。まず、原典と和文2本との異同、和訳される際に原典が自由に脚色された箇所がある。（中世では）大衆入浴の文化はヨーロッパにはないため、どうしてマリナの裸を見た人が一人もいないのか説明する必要性が感じられたなどの箇所がこれである。それからバレト写本と浦上本との間の200年間、口頭伝承と書写の過程で語調が整えられ、七五調に直され、概ね訓読に近いものが滑らかな語り物に推敲されてきたことが窺える。最後に、原典にはあってバレト写本にはない文言が浦上本にはあるという箇所も数例あるため、日本語写本2本は粉本関係にあるのではなく、1591年以前に分化していた違う系統同士に属しているということになる。このようにしてキリシタン文学の原典と現存諸本との比較研究の可能性を示す。

●第3回　2023年11月7日（火）Zoomオンライン

浅野ひとみ「「さまよえるユダヤ人」伝承：中近世西欧キリスト教会の経済を支えたメディア」

「さまよえるユダヤ人」伝承はテキストが存在せず、13世紀にアルメニア大司教が聖オーバン修道院を訪れた際にヨセフという神を冒涜した男について聞かれたことに応えるという伝聞記録が初出である。道行のキリストを靴型で殴りつけたユダヤ人が、孤独に世界中を放浪し続け、死ぬことも叶わないという悲話の背景には一所不定の巡礼刑が影響しているものと思われる。主人公の名前は変わりながら、イタリア、スペインで独自のストーリーが展開し、17世紀、「悔い改め」を促す風潮が広まる中で、ドイツで出版された呼び売り本はかなりの収益を挙げ、当時のサン・ピエトロ大聖堂改修工事の建築費に充てられたという。1570年頃にはピウスV世による「キリストとマリアのメダル」に対しての贖宥の付与（ただし、メダルそのものではなく、メダルに対して心から祈りを捧げる「行為」に対しての贖宥）がレパントの海戦の戦費捻出のために行われたと筆者はすでに指摘したが、宗教改革後、カトリック教会は新教側の批判をかわしながら実在のモノに信仰のよりどころを求める民衆の心を掴む工夫に余念が無く、「悔い改め」は祖先の追善供養（煉獄のアニマの救い）の前身として教会の経済を支える一端になったのではないだろうか。

● 第4回　2024年1月30日（火）Zoomオンライン

折井善果「近世初期日本における告解（ゆるしの秘跡）とキリシタン版『さるばとるむんぢ』」

従来孤本として知られていた、近世初期日本イエズス会版『さるばとるむんぢ』（1589年）の異植字版が、2022年ユトレヒト大学図書館において発見された。国語学・印刷史学における研究が急ピッチで進められているが、その内容についての分析は未だ少ない。『さるばとるむんぢ』はカトリック教会における告解（ゆるしの秘跡）の一要素である「告白（こんひさん）」に際して、自分の犯した罪を認め、悔い、司祭にそれを告白するための手引書で、先行する『どちりなきりしたん』等より具体的な条項にまとめられた小冊子である。当時の日本人信徒たちが何を「罪（科）」とみなしていたかが理解でき、それは翻って、宣教師たちが日本において、何を「罪」として信者を教導していたのかを簡潔に示している。子殺しや妾といった罪の糾明はもちろんだが、「百姓の前よりは大きなるますにて受け取り、主人へは小さきますにて納めたるや」といったように、良心（こんしえんしや）の統治が重視されている点に、イエズス会的特徴が垣間見られる。イエズス会巡察師ヴァリニャーノは、布教方法を批判した一フランシスコ会士に対し、日本という新しい地への適応のためには「知らなくてもよいこと」があると反駁し、その文脈の中で、『さるばとるむんぢ』の意義を述べている。当時のヨーロッパの倫理神学書として大いに流布した『ナバルスの提要 *Compendium Manualis Nauarri*』にあるような、数千におよぶカトリック倫理神学の規範の一つ一つを、すべて日本語に翻すことは得策ではないという判断から、『さるばとるむんぢ』は日本布教において独自に編纂されたのではないか。

日本中世寺社班

本年度はコロナ対策の廃止により、2019年度以前の業務形態が復活し、要職にある各構成員も多忙になってきたため、目立った研究報告会などを開くことはできなかった。実際に行われた打ち合わせは下記の通りである。

●第1回　2023年5月11日（木）Zoomオンライン

5月2日（火）に行われた総括班ミーティングの内容について、苅米から構成員に説明があった。主な内容は、11月に予定される国際シンポジウムの内容、2021年度に行われた「書物文化」に関するシンポジウムの成果論文集の刊行予定、研究終了後における成果報告書の内容について、などであった。

●第2回　2023年8月28日（月）Zoomオンライン

11月25日・26日に予定されている国際シンポジウムについて、より詳細な決定事項が苅米より説明された。

●第3回　2023年11月11日（土）Zoomオンライン

11月25日・26日に予定されている国際シンポジウムの最終確定案について、苅米より説明があった。特に報告担当者に対しては、報告上の注意事項などが伝達された。

この他、構成員が関わった企画としては、岡山県立博物館テーマ展「正宗敦夫と正宗文庫」（9月11日-10月15日。川崎剛志・研究分担者）、皇學館大学佐川記念館神道博物館企画展「ある伊勢御師の軌跡ー新発見・橋村家伝来資料から」（10月2日-11月3日。小林郁・研究分担者）があり、上記の打ち合わせ会でも周知がなされた。

受賞報告

第45回サントリー学芸賞を受賞して

小俣ラポー日登美（イエズス会班）

このたび、拙著『殉教の日本：近世ヨーロッパにおける宣教のレトリック』（名古屋大学出版会、2023年）に対して、第45回サントリー学芸賞をいただきました。

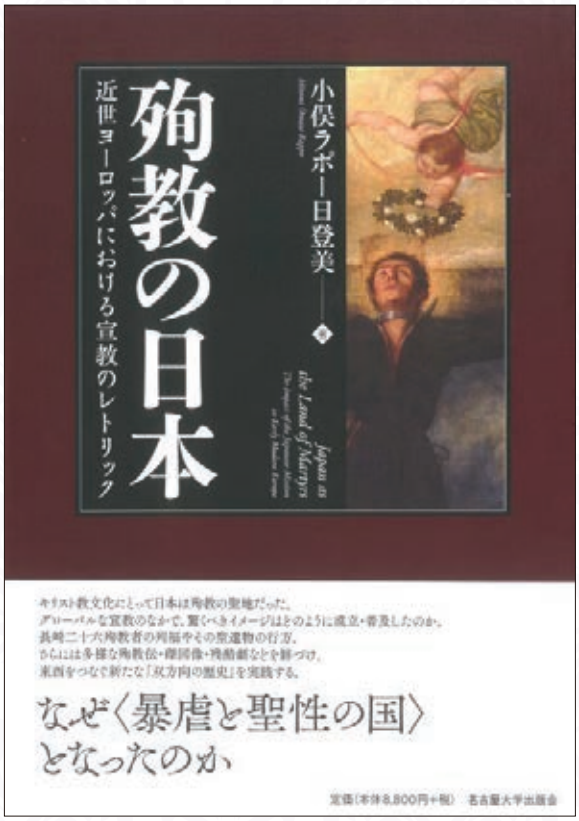
本書は、私が長年フランス、スイス、イタリアで行ってきた研究に基づいています。そう書くと、不思議と思われるかもしれません。日本の「殉教」事象についてならば、従来は日本史の中のキリシタン学と呼ばれる分野で研究されるべきで、ヨーロッパで資料を参照するのなら、イベリア半島の国々ではないのか、と。

私の研究は、果たして「殉教」の歴史は日本由来/固有の過去の実相であるのか、という疑問から出発しています。そもそも「殉教」という言葉は、他の西欧由来の近代的な知を体現する術語群（例えば「宗教」およびその関連用語）と同様に、明治期に創られました。前近代の殉教の歴史が、日本の歴史へと一体化していったのも、明治期および第二次世界大戦後のことです。実際に「殉教」の現象が起こった近世日本では、この言葉「殉教」は、（迫害の主体であった為政者のレベルでは）日本語に敢えて翻訳されず、一方でキリシタンたちは表音表記で表現しようとしました。

この事象の記憶は、系統立てられた資料に落とし込まれ、対抗宗教改革期に改訂されたばかりのバチカン法王庁の列福・列聖制度に則って公認され、そして文学的作品・各種の図像・祭り・演劇によってその存在が広く知らしめられたのですが、その舞台は17-18世紀のヨーロッパ社会でした。この過程で、日本の情報は南欧社会を超えて、対抗宗教改革の舞台であった現在のフランス語・ドイツ語圏にまで広がっていきます。「日本の実相」に拘泥せず、日本についての「言説の形成過程」に着目したとき、それは西欧の複数の言語圏にまたがる文化的文脈で捉えられる歴史になるのです。この視点の転回を経ると、日本史上の事実を知るためには役に立たない仏語・伊語・独語等の2次・3次（時にはそれ以上の）資料は、ヨーロッパ史上の一次資料に昇華します（これらは必ずしも刊行された活字とは限らず、祝祭の記録など手稿も含みます）。

本書ではさらに、西欧由来の西欧で醸成された日本観が、近現代において日本の歴史に内在化していく過程にも着目しました。サントリー学芸賞の評者の先生によれば、このように自分が研究を行う場所や位相そのものを相対化しようとする姿勢が、評価の対象になったようです。思えば在外研究中の私は、肩書きもなく、パトロンもいない一介のアジア人に過ぎず、かのゴーギャンの絵のように「どこから来て、何者で、どこに行くのか」を問われ続ける存在でした。常に Alien である環境で、ヒリヒリした異文化体験が日常となる中、日本の歴史や言葉の意味について思いを馳せたことが、このような研究に結実したと思っています。

日本で研究させていただいていると、自分の母語で考え・表現し・執筆する正当性に何の疑いも持たず、その豊かさを享受させてもらえます。その一方で、アカデミックな用語の一部は、あまりにも巧みに日本語や日本語話者の思考に浸透しており、それが西欧言語における術語と等価であるとうっかり信じてしまいそうになります。慣れない外国語のさまざまと格闘しながら他者と邂逅した際の焦燥感を今後も忘れず、その間隙にひそむ違和感を言語化し分析し書いていくことを今後もこころがけていきたいと思っています。



最終成果刊行のお知らせ

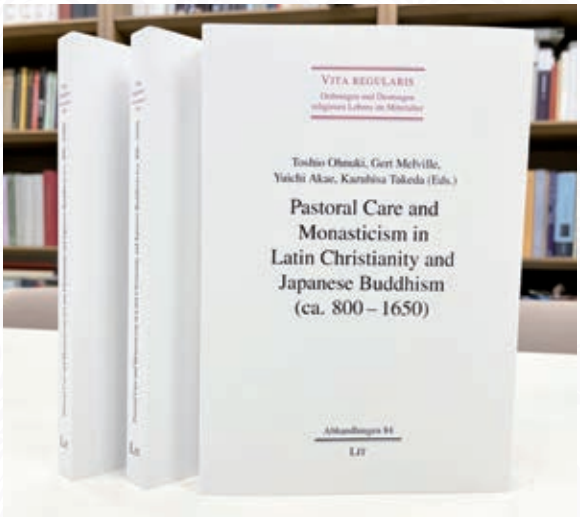
大貫 俊夫（観想修道会班）

Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, Kazuhisa Takeda (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)*, Münster: LIT Verlag, 2024.
https://www.lit-verlag.de/isbn/978-3-643-15497-2

ReMo研全体の研究成果として2024年2月に刊行された本書は、「司牧と修道制」を共通テーマとする13本の論文を収めている。キリスト教修道制には非常に多様な型があり、それぞれの司牧への姿勢は一律ではない。しかしそこで共通して観察されるのは、修道士が自身に課している修道規範と司牧とのあいだの摩擦と、それを乗り越えながら発揮される社会のキリスト教化に向けた創意工夫である。さらに、これに対して中世日本の仏教文化はどのような対比を見せるのだろうか。

本書は、2019年3月1日、2日に岡山大学津島キャンパスで実施した国際シンポジウム "Pastoral Care and Monasticism: ca. 800-1650" が元になっており、これが大きな契機となって、以後ドレスデン工科大学の比較修道会史研究所（FOVOG）との国際連携が進み、ニューズレター前号で紹介したGlobal Association for Historical Research of Monasticism（GARMon）の結成にもつながった。シンポジウム開催後、ReMo研はその枠組みを引き継ぎ、新しい研究成果を盛り込みつつ本書の編集を進めてきた。目次は以下の通りである。

- Toshio Ohnuki, Yuichi Akae, Kazuhisa Takeda, Gert Melville
  Acknowledgement
  Note for the English Terminology of Buddhist Religious



- Gert Melville
  Canonistic Discourses in the Middle Ages on Monks and Pastoral Care

I. Benedictine and Cistercian Monasticism and Pastoral Care

- Shigeto Kikuchi
  Monks, Monasteries, and Pastoral Care in the Carolingian Age: Some Remarks on Its Conditions
- Mirko Breitenstein
  Examination – Prayer – Confession. Literary Models for Pastoral Care in Twelfth Century Western Monasteries
- Toshio Ohnuki
  The Cistercians, Parish Churches, and Pastoral Care in the High Middle Ages
- Emilia Jamroziak
  Cistercians and the Care of Souls from the Twelfth to the Early Sixteenth Century

II. Mendicant and Military Orders, Jesuits, and Pastoral Care

- Yuichi Akae
  From Preaching to Written Treatises: Choice of Genres in Pastoral Expositions by John Waldeby OESA
- Yoko Kimura
  Preaching on/for Women by a Dominican Friar in Savonarolan Florence: A Sermon Collection by Marco di Pietro Succhielli
- Jörg Sonntag
  Playing with God: Games as Tools of Pastoral Preaching in the Late Middle Ages
- Robert Harlaß
  Pastoral Activities and the Teutonic Order Using the Example of Their House in Weimar in the Fifteenth Century
- Kazuhisa Takeda
  Jesuit Militant Pastoral Care both in the Old and New World: A Study of the Spiritual Treatment on the Battlefield from Antiquity to Early Modern Period

III. Buddhist and Christian Pastoral Care in Medieval and Early Modern Japan

- Hitoshi Karikome
  Pastoral Care by Buddhist Temples in Medieval Japan
- Hiroe Nukui
  Reconstruction and Historiography of Temples in Medieval Japan Focusing on the Tōji Temple and its History Book Tōbōki
- Carla Tronu
  Pastoral Care by Jesuits and Mendicants in the Early Modern Japanese Mission (16th–17th c.)

最終成果報告

大貫 俊夫、赤江 雄一、武田 和久、苅米 一志著『修道制と中世書物 —— メディアの宗教比較史に向けて』八坂書房、2024年。

同じくReMo研全体の研究成果として、最終年度末に本書の刊行にこぎつけることができた。本書はニューズレター No. 1で紹介したReMo研シンポジウム2021「東西中世における修道院・寺社の書物文化——制作・教育・世界観の変容」を元にしたもので、中世ヨーロッパと中世日本の宗教文化における書物の役割として、「書物文化の定着」、「知の継承」、「アイデンティティの確立」に焦点を絞り、最新の史料分析を含む論文を収録している。第I部の「総論」では、中世から近世にかけてのキリスト教修道制と日本中世仏教において創出された書物メディアとその展開について、上に挙げた3つのトピックを中心に比較史的アプローチを意識しながら論じている。これに目を通すことで、第II部以降の各論の理解がいっそう深まることだろう。

第I部　総論

- 大貫 俊夫、赤江 雄一、武田 和久、苅米 一志
  はじめに
  キリスト教修道制における書物メディアとその展開
  日本中世仏教における書物メディアとその展開

第II部　書物文化の醸成

- 安藤 さやか
  西欧初期中世秘蹟書写本の装飾イニシアル——vere dignumとte igiturのイニシアル・ページの機能をめぐって
- 林 賢治
  二重修道院の書物——セッカウ修道院の書物係ベルンハルト（1140-84/85）の足跡を追って

第III部　書物による知の継承・改変

- 長友 瑞絵
  西欧中世の修道院と動物寓意テキストについて——Dicta Chrysostomi版フィシオログス写本の分析から
- 阿部 晃平
  世俗知から宗教知へ——ボエティウス『哲学のなぐさめ』に見る知的世界観の変容
- 山本 潤
  ドイツ語圏英雄伝承の教化素材化——ニーベルンゲン伝説およびディートリヒ伝説を題材に

第IV部　歴史叙述とアイデンティティ（・ポリティクス?）

- 梶原 洋一
  托鉢修道会のアイデンティティと書物
- 荒木 文果
  『キリストの生涯についての黙想』をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略
- 白川 太郎
  聖マルゲリータ・ダ・コルトーナをめぐる記憶の政治と書物——13-14世紀転換期におけるフランチェスコ会・イタリア都市・聖人崇敬

第V部　日本中世との比較

- 川崎 剛志
  聖地と日本仏教史の再創出——『金剛山縁起』の偽撰と受容
- 宗藤 健
  「東国の王権」を守護する観音——真名本『曾我物語』・『源平闘諍録』・坂東三十三所縁起

2023年度業績一覧

A01 観想修道会班

● 論文

安藤 さやか（単著）：「Das Erbe der karolingischen Buchmalerei: Initialornamentik der illuminierten Handschriften aus Corvey」『東京芸術大学西洋美術史研究室紀要』No. 21、2023年、7-22頁。

片山　幹生（単著）：「文学的寓意としての中世ハープ：ギヨーム・ド・マショー『ハープの賦（ディ）』読 解」*Études Françaises*（早稲田フランス語フランス文学論集）第30号、2023年、20-34頁。

北舘　佳史（単著）：「クレルヴォー修道院の祭壇と聖遺物」『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）第106号、2023年、127-156頁。

三浦　麻美（単著）：「Building a Center of Pilgrimage: St. Elisabethkirche in Marburg and Indulgence in the Thirteenth Century,」『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）、第106号、2023年、21-37頁。

山本　　潤（単著）：「「怒りzorn」と「敵意haz」：中世叙事文学に見る感情の表象するもの」『西洋中世研究』第15号、2023年、16-32頁。

：“Historizität der mittelhochdeutschen Heldendichtung: Eine Analyse aus der Perspektive des historiographischen Geschichtsverständnisses,” *Neue Beiträge zur Germanistik* Band 21/ Heft 1, Japanische Gesellschaft für Germanistik (Hrsg.), München: iudicium Verlag, 2023, S. 14-32.

●書籍

大貫　俊夫（共編著）：Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)*, Münster: LIT Verlag, 2024（担当箇所：全体の校正、“The Cistercians, Parish Churches, and Pastoral Care in the High Middle Ages,” pp. 61-76）。

：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：総論、あとがき）

片山　幹生（共著）：日本ケベック学会編『ケベックを知るための55章』（第2版）明石書店、2024年（担当箇所：「ケベックのシャンソン：ナショナリズムの表明から社会の多様性の表象へ」）。

：『カナダ文化事典』丸善出版、2024年5月刊行予定（担当箇所：「仏語圏のポピュラー音楽」）。

金沢　百枝（単著）：『キリスト教美術をたのしむ：旧約聖書篇』新潮社、2024年。

菊地　重仁（共著）：Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)*, Münster: LIT Verlag, 2024（担当箇所：“Monks, Monasteries, and Pastoral Care in the Carolingian Age: Some Remarks on its Conditions,” pp. 27-48）。

林　　賢治（共著）：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：「二重修道院の書物：セッカウ修道院の書物係ベルンハット（1140-1184/85）の足跡を追って」）。

山本　　潤（共著）：前田佳一編『モルブス・アウストリアクス』法政大学出版局、2023年（担当箇所：「「ドイツ」国民叙事詩?：オーストリア文学史叙述における『ニーベルンゲンの歌』」33-55頁、「敷居に立つニーベルンゲン：マックス・メルによる二部作『ニーベルンク族の災厄』」、163-186頁）。

：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：「ドイツ語圏英雄伝承の教化素材化―ニーベルンゲン伝説およびディートリヒ伝説を題材に」）

●研究発表・講演

片山　幹生：「ケベックの先住民演劇の現況と展望」日本ケベック学会定例研究会、立教大学、2023年7月15日、立教大学。

：「文学的表象としての中世ハープ：宇宙の調和から宮廷風恋愛の寓意まで」フォンス・フローリス古楽院秋期講座2023、LM文学講座（オンライン）2023年9月2日、10月14日。

金沢　百枝：「中世の動物」アーティゾン美術館招待講演、2023年9月8日。

：「西洋工芸と絵画」日本民藝館招待講演、2023年11月11日。

：“The Sculptural Decorations in the Cistercian Cloisters: Iconoclasm or Classicism?,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

菊地　重仁：“On the use of capitulary texts in the time of Louis the Pious: some remarks on the documents of 818/819 ,” International Medieval Congress 2023. Session 308: Law and empire: the capitularies of Louis the Pious, 814-840, III、2023年7月3日。

：“Mobility and (In)stability in the Early Medieval Adriatic Region,” Water Networks, Islands, and Political Powers in the Global Middle Ages, Rikkyo University、2023年10月7日。

：「趣旨説明」「コメント（中世前期の教皇文書から）」中世後期の教皇と文書（2023年度史学会大会西洋史部会部会シンポジウム）2023年11月12日。

：“Expected and unexpected network-building: Translations of relics and their resonance in the Frankish world,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

大貫　俊夫：“Entanglements and Self-Transformation: The Case of Cistercian Pastoral Care,” ‘Entangled’ Monasticism in Medieval and Early Modern Christianity: A Comparison with Medieval Japanese Buddhism, International Medieval Congress 2023, Leeds、2023年7月6日。

北舘　佳史：「地域の記憶から修道会の記憶へ：『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』の比較検討」西洋中世学会第15回ポスター報告、2023年6月18日。

：“Obazine and its Local Relationships in the Life of Saint Stephen,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

林　　賢治：“Die Übernahme benediktinischer Consuetudines für ein Augustinerchorherrenstift – Die Bestimmungen über das Totenritual im Cod. 1488 aus Salzburg (ÖNB), ” Landesgeschichtliches Kolloquium der Professur für Mittelalterliche Geschichte I im WiSe 2023/24、2023年10月31日。

三浦　麻美：“A Medium for a Developing Network? Elisabethkirche and the Teutonic Order, 1235-1309,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月26日。

：“Joan the Girl? The Reception of Joan of Arc in Japan,” Women in Medievalism, 2024年2月24日。

●短報・書評・アウトリーチなど

安藤 さやか（単著・研究調査報告）：「《エッセンの福音書》Essener Evangeliar, Essen, Domschatz, Hs. 1」『東京芸術大学西洋美術史研究室紀要 』No. 21、2023年、93-96頁。

大貫　俊夫（司会）：“Networks of Religious Debates in the Medieval Christian World,” International Medieval Congress 2023, Leeds、2023年7月4日。

（書評）：「三佐川亮宏『オットー大帝：辺境の戦士から「神聖ローマ帝国」樹立者へ』」『週刊読書人』2023年11月3日 、4頁。

（コメント）：「2023年度歴史学研究会大会報告批判 」『歴史学研究』1043号、2023年、36-37頁。

（講演）：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第10回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年4月11日。

：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第11回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年5月9日。

：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション　第12回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年6月13日。

：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：歴史解釈のゆらぎ　第1回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年7月11日。

：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：歴史解釈のゆらぎ　第2回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年8月8日。

2023年度業績一覧

：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：歴史解釈のゆらぎ　第3回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年9月11日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：中世映画の描き方　第1回―モンティ・パイソン・アンド・ホーリー・グレイル」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年10月3日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：中世映画の描き方　第2回―ロビン・フッド」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年11月14日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：中世映画の描き方　第3回―ジャンヌ・ダルク」朝日カルチャーセンター新宿教室、2023年12月12日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：メディアに描かれる中世　第1回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2024年1月16日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：メディアに描かれる中世　第2回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2024年2月20日。
：「中世ヨーロッパのファクトとフィクション：メディアに描かれる中世　第3回」朝日カルチャーセンター新宿教室、2024年3月19日。
：「ヨーロッパの中世観はどのように作られたのか」東京都立大学オープンユニバーシティ、2023年5月22日。
：「『チ。―地球の運動について―』と歴史マンガの可能性」東京都立大学オープンユニバーシティ、2023年9月5日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第1回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年7月18日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第2回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年7月25日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第3回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年8月1日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第4回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年8月8日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第5回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年8月22日。
：「中世修道院の世界：社会の中の修道院　第6回」早稲田大学エクステンションセンター、2023年9月5日。
：“Rezeption und Darstellung des mittelalterlichen Mönchtums in japanischen Mangas,” Online-Ringvorlesung WiSe 2023/24 Monasteries in Modern Media、ドレスデン工科大学（オンライン）、2023年12月13日。

片山　幹生
（書評）：「高田博行他著（2022）『言語の標準化を考える―日中英仏語「対照言語史」の試み』」*Revue Japonaise de Didactique du Français*（日本フランス語教育学会）Vol. 18, n.1-2, 2023, pp. 134-137.
（小稿）：“L’ univers des théâtres amateurs au Japon,” *JEU : Revue de théâtre*, no. 188 (4), 2023, pp. 37-41.

金沢　百枝（新聞記事）：「金曜名作館：劇作家・俳優モリエール生誕400年」『しんぶん赤旗』2023年10月6日、第14面。
（講座）：「中世美術の技法：フレスコ画、モザイク画、テンペラ画、羊皮紙、カリグラフィー実習」（その技法と実習）新潮社主催、2023年4-8月。
：「中世の世界地図第2回：ヘレフォードの世界地図と動物」多摩美術大学生涯学習センター講座、2023年10月13、20日。
：「研究者にきく：ロマネスク再考」（小澤実と共同）、高山博（シチリア中世史）、塚本麿充（北宋美術史）、吉川文（中世音楽史）と登壇、2024年1月24日-4月28日。
：「V&A美術館」多摩美術大学生涯学習センター講座、2024年1月27日。
（書評）：「五十嵐ジャンヌ『洞窟壁画考』青土社」日本経済新聞、2024年 1月13日朝刊。
（連載）：「日本経済新聞朝刊「美の十選」：「ロマネスクの技法と表情」10回」2024年2月19日-3月1日。
（研究ノート）：「シトー派修道院回廊における柱頭彫刻：問われる「ローマ」への視線」*Art Anthropology*（多摩美術大学 アートとデザインの人類学研究所）19号、2024年3月末刊行予定。

菊地　重仁
（監訳・訳注）：荻野美櫻子・上遠野翔・清水栞・長澤咲耶・弓岡弘樹・李彦博訳「史料試訳 リヨン大司教アモロのラングル司教テウトバルドゥス宛書簡」『クリオ』第37号、2023年、60-79頁。

北舘　佳史
三浦　麻美（翻訳）：「『オバジーヌの聖エティエンヌ伝』試訳（六）」『紀要』（中央大学文学部）第 301号、2023年、75-91頁。
：「聖女の奇書：ハッケボルンのメヒティルト『特別な恩寵の書』と西洋中世の神学」『ユリイカ』55巻9号、2023年6月28日、264-270頁。

A02 托鉢修道会班

●論文

赤江　雄一（単著）：「「感情の共同体」としての学識ある聖職者：14世紀の説教の聴衆」『西洋中世研究』15号、2023年、6-15頁。
原　　基晶（単著）：「ダンテとは誰なのか：『神曲』解釈の第一歩として」（報告2　論文）『文明』（東海大学文明研究所）2024年3月発行予定。

●書籍

赤江　雄一（共編著）：Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)*, Münster: LIT Verlag, 2024（担当箇所：全体の校正、“From Preaching to Written Treatises: Choice of Genres in Pastoral Expositions by John Waldeby OESA,” pp. 91-104）。
：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：総論）
（共著）：徳永聡子編『神・自然・人間の時間：古代・中近世のときを見つめて』慶應義塾大学出版会、2024年3月刊行予定（担当箇所：「西欧中世における説教の「心中の暦」：説教者は年間を通じて説教内容をどのように決定したか」）。

荒木　文果（共著）：金山弘昌ほか『迷宮のアルストピア：新しきイマジナリアを求めて』ありな書房、2024年1月（担当箇所：「もうひとつの『グロテスク』の系譜―フィリッピーノ・リッピからミケランジェロへ」、59-98頁）。
：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：「『キリストの生涯についての黙想』をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略」）。

梶原　洋一（共著）：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：「托鉢修道会のアイデンティティと書物」）。

駒田亜紀子（監修）：『文字と絵の小宇宙　国立西洋美術館　内藤コレクション写本リーフ作品選』（改訂版）国立西洋美術館、2024年。
（分担執筆）：項目「イメージと言葉」小澤実編集代表『西洋中世文化事典』丸善出版、2024年、掲載頁未定。
：項目：小項目「キリストのたとえ話【図像】」、「写本彩飾」、「ビーブル・モラリゼ」、「ヨアキム」、「楽園追放」『新版　キリスト教大事典』教文館、印刷中、掲載頁未定。

白川　太郎（共著）：森原隆編著『ヨーロッパの『統合』の政治文化史』（仮）成文堂、2024年3月出版予定（担当箇所：「中世イタリア都市における『市民的信仰』と都市共同体の統合：14世紀コルトーナの事例から」）。
：大貫俊夫ほか編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月出版予定（担当箇所：「聖マルゲリータ・ダ・コルトーナをめぐる記憶の政治と書物：13-14世紀転換期におけるフランチェスコ会・イタリア都市・聖人崇敬」）。

●研究発表・講演

荒木　文果：「マルチバースと美術史学の親和性」石井・石橋基金2023 第1回研究会　（慶應義塾大学・ハイブリッド）、2023年8月16日。
：「永遠の都　ローマ展」福岡日伊協会主催美術セミナー（福岡市美術館）2024年1月11日。

梶原　洋一：「中世ヨーロッパの托鉢修道会と大学学位―ドミニコ会とフランシスコ会」関西比較中世都市研究会 、大阪市立大学、2023年9月15日。
：「学歴社会の誕生?中世における大学とドミニコ会」東京日仏会館、2023年11月6日。

白川　太郎：“Clare of Montefalco and her pastoral activities,” Workshop: KU Leuven - Waseda University (Waseda University)、2023年6月9日。
：“Pescatori più utili delle anime». Le missioni francescane nella legenda di Margherita da Cortona,” Conferenza in intermediazione culturale e religiosa (Universita degli studi di Firenze)、2023年9月7日。
：「『最も有益な魂の漁師』？14世紀初頭コルトーナにおけるフランチェスコ会士・預言者・司牧革命」第91回西洋史読書会大会（京都大学）、2023年11月3日。
原　　基晶：「ダンテ研究の今：人生・テクスト・解釈（没後700周年の後で）」日本中世英語英文学会研究助成セミナー、早稲田大学早稲田キャンパス、2023年12月3日。
：「ダンテとは誰なのか：『神曲』解釈の第一歩として：「知のフロンティア」シンポジウム：「文化知と学問」東海大学湘南校舎、2023年12月6日。

●短報・書評・アウトリーチなど

荒木　文果（エッセイ）：「美の規範としてのイタリア美術」『福岡日伊協会会報』Vol. 8、2023年9月、9頁。
：「ローヴェレ宮殿：ネロ帝の劇場からフォーシーズンズ・ホテルへ」『地中海学会月報』465号、2024年1月、5頁。
梶原　洋一（新刊紹介）：「Joël Chandelier & Aurélian Robert (ed.), *Savoirs profanes dans les ordres mendiants en Italie (XIIIe - XVe siècle)*, Rome, École Française de Rome, 2023」『西洋中世研究』15、2023年、171-172頁。

A03 イエズス会班

●論文

岡田　正彦（単著）：“The Founder of Toshiba, Tanaka Hisashige and Buddhist Astronomy: The Modernization of Japan and the Traditional Conception of the Universe,” *Historia Scientiarum* 32 (2), 2023, pp. 139-156.
：「井上円了と社会改良の夢：『哲学飛将碁』をめぐって」『井上円了研究センター年報』第31号、2023年、111-132頁。
小俣ラポー日登美（単著）：“From the Cross to the Pyre: The Representation of the Martyrs of Japan in Jesuit Prints,” *Journal of Jesuit Studies* 10 (3), 2023, pp. 456-486.
：「山伏に擬せられたイエズス会士：とある啓蒙思想家から見た日本」『人文学報』121号、2023年、79-113頁。
：「奇跡を実験する」『現代思想』10号、2023年、72-81頁。
：「長崎二十六聖人崇敬の近世から近代への連続性：列聖化（1862年）直後の図像から」『KADOKAWA』2024年3月刊行予定。
折井　善果（岸本恵実、白井純との共著）：「キリシタン版『さるばとるむんぢ』ユトレヒト大学本の発見：思想史およびキリシタン語学からの検討」『大阪大学大学院人文学研究科紀要』第1巻、2024年（採録決定済み）。
アンドレス・メナチェ（単著）：「『イエズス会日本コレジオの』に見られる天使と悪魔像について」『基督教学研究』第43号、印刷中。
平岡　隆二（単著）：「開陽丸引き揚げ文書と梅文鼎『暦算全書』」『洋学』30号、2023年5月、159-165頁。

●書籍

浅野 ひとみ（共編著）：浅香武和編著『カンティーガス・デ・サンタ・マリアへの誘い：聖母マリア頌歌集』論創社、2023年（担当箇所：「『聖母マリア頌歌集』における赦しの聖母マリア：カンティーガスにみる聖職者の破戒」、93-151頁）。
（共著）：千々石ミゲル墓所発掘委員会編『千々石ミゲル夫妻伊木力墓所報告書』（仮）、印刷中（担当箇所：「千々石ミゲル夫妻伊木力墓所出土ガラス製品に関する一考察」）。
：長崎市教育委員会編『八百屋町遺跡（長崎市）発掘調査報告書』（仮）、印刷中（担当箇所：「八百屋町遺跡（長崎市）出土品に関する美術史的考察」）。
石川　博樹（アフリカ史関連項目監訳）：ネマータ・ブライデン編著、沢田博訳『黒人の歴史：30万年の物語』河出書房新社、2023年7月26日。
（共編著）：吉澤誠一郎監修、石川博樹、太田淳、太田信宏、小笠原弘幸、宮宅潔、四日市康博編集、鄭天恩訳『論點・東洋史學：一本掌握！橫跨歐亞非大陸的歷史學關鍵課題』臺灣商務印書館，2023年7月1日（2022年1月10日に昭和堂から出版された編著『論点・東洋史学』の中国語訳）。
岡田　正彦（編著）：『セイコーミュージアム銀座（大橋時計店所蔵）須弥山儀と関連資料』科学研究費助成事業（基盤研究C）岡田正彦（研究代表）「近代日本における暦の流通と仏教・神道・陰陽道の展開に関する宗教社会史的研究」研究成果報告書、2023年。
小俣ラポー日登美（共著）：*L'IMAGE PENSIVE Devises et emblèmes du XVIe au XXIe siècle*, Paulette Choné et al. (dir.), Paris : L'Harmattan, 2023（担当箇所：“Comment représenter les martyrs du Japon par l' emblème ? L' Imago primi saeculi et ses représentations des héros des terres de mission,” pp. 107-126）。
：*Profiling Saints: Images of Modern Sanctity in a Global World*, Elisa Frei et al.(ed.), Vandenhoeck & Ruprecht, 2023（担当箇所：“Profiling The Japanese Martyrs,” pp. 289-304）。
：*Le théâtre de collège au XVIII ème siècle*, Nicolas Brucker (dir), Editions de l'Université de Bruxelles, 2023（担当箇所: “Les Jammabos, ou les moines japonais (1779). Une parodie du théâtre jésuite,” pp. 53-68）。
：川村信三ほか編『キリシタン1622 400年目の省察』教文館、2024（担当箇所：「ロヨラ・ザビエル・殉教者：初期イエズス会の霊性」、154-171頁）。
折井　善果（共著）：Manuela Bragangnolo (ed.), *Legal Books and Beyond in the Iberian Worlds: Normative Knowledge Production in the Age of Printing Press* (Max Planck Studies in Global Legal History of the Iberian Worlds), Leiden: Brill. 2023（担当箇所：“Pietro Alagona' s *Compendium Manualis Navarri* Published by the Jesuit Mission Press in Early Modern Japan,” pp. 372-388）。
：大橋幸泰編『近世日本のキリシタンと異文化交流』勉誠出版、2023年（担当箇所：「日本のキリスト教迫害下における「偽装」理論の神学的源泉」、55-73頁）。
武田　和久（共編著）：Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds.), *Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)*, Münster: LIT Verlag, 2024（担当箇所：全体の校正、“Jesuit Militant Pastoral Care both in the Old and New World: A Study of the Spiritual Treatment on the Battlefield from Antiquity to Early Modern Period,” pp. 167-201）。
：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：総論）
平岡　隆二（共著）：「キリシタンと時計伝来」大橋幸泰編『近世日本のキリシタンと異文化交流』勉誠出版、2023年7月（担当箇所：「キリシタンと時計伝来」、11-31頁）。

●研究発表・講演

浅野 ひとみ：片多雅樹・浅野ひとみ他「東京国立博物館所蔵カトリック・メダルの金属組成」日本文化財科学学会、天理大学、2023年10月22日。
：「さまよえるユダヤ人」伝承：中近世西欧キリスト教会の経済を支えたメディア」2023年度イエズス会班第3回研究会、2023年11月7日。
石川　博樹：「『メネン皇后学校料理書』とエチオピア北部における副食の歴史的変化」日本ナイル・エチオピア学会第31回学術大会、日本ナイル・エチオピア学会第31回学術大会、大阪公立大学&オンライン開催、2023年4月16日。
：「エチオピアにおけるインジェラの調理技法の確立時期」日本アフリカ学会第60回学術大会、幕張国際研修センター、2023年5月13日。
：「アフリカ食文化史研究の最前線：エチオピアの酸っぱいパンケーキの謎に迫る」第18回四大学連合文化講演会、東京医科歯科大学、2023年8月26日。
：“Birth of Injera in Ethiopia,” International Workshop “Food as a Window to the Past: Africa, Asia and the Pacific,” Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 25 September 2023.
：「アフリカ食文化史研究が問いかけるもの」西東京三大学共同サステイナビリティ国際社会実装研究センター サステイナビリティ研究オープンセミナー 第2回「世界の食と農」、東京農工大学、2023年12月2日。

2023年度業績一覧

：「19世紀半ばのエチオピアにおける「インジェラ」」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「アフリカ食文化研究：変貌しつつあるその実像に迫る」2023年度第3回研究会、京都大学稲盛財団記念館、2024年3月24日。

岡田　正彦：「明治改暦と近代仏教」（パネル：明治改暦150 年に近代日本を問うにおける発表）日本宗教学 第82回学術大会、東京外国語大学、2023年9月9日。

小俣ラポー日登美（主催ワークショップ）：「文化翻訳の過去・現在・未来」京都大学白眉センター 、2023年5月26日。

（シンポジウム企画・発表）：「科学の物語、物語の科学――科学の生きる時間軸をさかのぼる学際研究」白眉センター後援 シンポジウム、2023年7月22日。

（主催ワークショップ）：Stereotypes Revisited 京都大学白眉センター 2023年10月5日。

：“Mining for Gold in the Textual Vein: A Text Mining Analysis of the Intertextuality between the Legenda Aurea and the Martyrologies of the Reformative Era,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月26日。

：「歴史のためのテキストマイニング：中世ー宗教改革期の宗教テキストの相関性をコレスポンデンス分析から検証する」京都大学人文科学研究所、2023年12月27日。

：「事実のつくりかた：イメージと言説の再生産の紡ぐ歴史」サントリー文化財団フォーラム、2024年2月20日。

：“Distant Reading of Martyrologies in the Reformative Era: Text Mining Analysis for Assessing Stereotypes. Europa ed Estremo Oriente: relazioni, incontri e conflitti nella prima età moderna, Università di Frenze、2024年3月7日。

：「近世ヨーロッパの殉教伝のテキスト・マイニングから見る日本：イメージと言説の再生産が紡ぐ歴史」日文研シンポジウム 日本宗教・思想文化の接合域と多面性を考える：「他者」とどのように向き合ったのか、2024年3月23日。

折井　善果：「パリ国立図書館蔵『サントスの御作業』の書き入れについて：17世紀フランス東洋学との関係」キリスト教史学会第75回大会、東北学院大学、2023年9月16日。

：「近世初期日本における告解（ゆるしの秘跡）とキリシタン版『さるばとるむんぢ』」2023年度イエズス会班第4回研究会、2024年1月30日（オンライン）。

パトリック・シュウェマー：「キリシタン聖人伝「サンタマリナの御作業」におけるローカリゼーションと口頭伝承：ポルトガル語原典に照らして」2023年度イエズス会班第2回研究会、2023年10月2日。

武田　和久：“A Reconsideration of Jesuit Modernity from the Entangled Perspective,” ‘Entangled’ Monasticism in Medieval and Early Modern Christianity: A Comparison with Medieval Japanese Buddhism, International Medieval Congress 2023, Leeds、2023年7月6日。

：“A Reconsideration of Jesuit Modernity from the Entangled Perspective,” （International Medieval Congress 2023, Leedsにおける研究発表の概要報告）2023年度イエズス会班第1回研究会、2023年8月1日。

：“The Constitutions of the Society of Jesus: A Collective Entity of the Multifaceted Monastic Identity,” Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

平岡　隆二：「禁教・潜伏・発見：キリシタンの3世紀（1614-c.1920）」人文研アカデミー 2023シンポジウム「もう一つの〈キリシタン信徒発見〉：1879年茨木・千提寺とフランス人宣教師」、京都、2023年7月17日。

：“A Jesuit Cosmology Textbook in Japanese Translation: the Discovery and Significance of Sufera no nukigaki スヘラの抜書(Selection on the Sphere),” The 16th International Conference on the History of Science in East Asia (16th ICHSEA), Frankfurt am Main、2023年8月22日。

：“Exploring Cosmology with a Clockwork Astronomical Model: A Public Scientific Lecture in 18th Century Japan,” EHESS seminar “Sciences et savoirs de l'Asie orientale dans la mondialisation (XVIe-XXIe siècle),” Paris、2023年11月8日。

：“Cosmology in Translation: A Case of Jesuit Textbook during Japan’s “Christian Century,” International Workshop “Latin as a Cultural Interface between Europe and East Asia in Catholic Missions (16th-18th Centuries)” organised by Université d'Orléans and IRFA, Paris、2023年11月9日。

：「キリシタン布教と科学伝来：新発見の宇宙論教科書『スヘラの抜書』を中心に」洋学史学会若手部会例会、大阪、2023年12月17日。

アンドレス・メナチェ：「「歴史」の変遷と現代アートについて」東北芸術工科大学、2023年5月18日。

：「日本の初期宣教に見られる補陀落渡海と「悪魔の殉教者」との関係について」新キリシタン学研究会第3回例会、早稲田大学、2023年5月21日。

：“From ‘barbarians’ to ‘wicked’ : the perception of Christian Religion in Early Modern Japan,” Masaryk University, Department of Japanese Studies, 2023年6月11日。

：“Between the boat and the cross: a comparative study of the western account of the Fudaraku Sailing and the Japanese depiction of Christian martyrdom in early modern Japan,” 17th International Conference of the European Association of Japanese Studies, Ghent University、2023年8月18日。

●短報・書評・アウトリーチなど

浅野ひとみ（依頼鑑定）：東彼杵教育委員会 長崎県指定文化財東彼杵キリシタン墓碑一基 実地調査（荘屋公園）・文献調査（東彼杵歴史民俗資料館）、2024年1月31日（所見準備中）。

小俣ラポー日登美（書評）：Martin Nogueira Ramos, *La foi des ancêtres. Chrétiens cachés et catholiques dans la société villageoise japonaise, xviie-xixe siècles* (Paris, CNRS Éditions, 2019, 416 p.), *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, 78 (1) 2023, pp. 187-189.

アンドレス・メナチェ（書評）：“Akira Saitō, ed., Evangelization and Accommodation. Catholic Global Missions of the Early Modern Period. Nagoya-Japan: The University of Nagoya Press, 2020,” *Archivum Historicum Societatis Iesu,* Vol. 91, 2022, pp. 808-816.

平岡　隆二（取材）：「関西の隠れキリシタンはいつ「発見」？　明治期の書簡を仏で確認」『毎日新聞』夕刊社会面、2023年5月9日。

（史料紹介）：「「キリシタンと時計伝来」関連史料」大橋幸泰編『近世日本のキリシタンと異文化交流』勉誠出版、2023年7月、74-88頁。

（取材）：「家族内で信仰 改宗に反対も―大阪・茨木の隠れキリシタン「発見」を再考察」『毎日新聞』夕刊・文化面・Web版、2023年8月21日。

：「西洋天文学 最古の邦訳　16 ～ 17世紀、独で発見　来日宣教師が編集」『読売新聞』夕刊一面・Web版、2023年9月25日。

：「‘Oldest’ Japanese Text on Western Science Unearthed in Germany Library」『The Yomiuri Shinbun』Culture欄・Web版、2023年9月26日。

B01 日本中世寺社班

●論文

鎌倉　佐保（単著）：「「開発領主」と荘園の形成―荘園をどう教えるか」『史海』69号、2023年、1-22頁。

苅米　一志（単著）：「魚食と肉食のあいだー中澤克昭著『肉食の社会史』によせて」『民衆史研究』106号、2024年、19-29頁。

小林　　郁（単著）：「神宮文庫所蔵『来田家旧蔵資料』の中世文書について」『三重県史研究』39号、2024年、69-84頁。

千枝　大志（単著）：「Yamada Hagaki（山田羽書）：An Investigation of Japan's Oldest Private Paper Currncy-A Numismatic Study of Japan's Oldest Paper Currency in the Tokugawa Period」『経済史研究』27号、2024年、19-34頁。

服部　光真（単著）：「元興寺の歴史と伝説」『近畿文化』882号、2023年、1-4頁。

藤本　　誠（単著）：「摂関院政期における疾病（障害）表現の基礎的考察―四肢の疾病・盲・皮膚疾患を中心として」『障害史研究』5号、2024年、1-22頁。

：「日本古代の疾病（障害）表現の特質―仏教関係史料を手がかりとして」障害史研究会編『障害史へのアプローチ』（2019-23年度科研成果報告書・障害史研究別紙）、2024年、1-16頁。

（単著）：「平安時代後期の讃岐国善通寺・曼荼羅寺地域における「聖域」空間の成立と巡礼僧」愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター研究紀要『四国遍路と世界の巡礼』9号、2024年、17-24頁。

守田　逸人　：「善通寺伽藍図にみえる結界意識」『隔月インタビュー』178号、2023年、10-12頁。

●書籍

上野　進（共編著）：『弘法大師空海生誕1250年記念特別展　空海』香川県立ミュージアム、2023年（担当箇所：「弘法大師を慕う人々と中世の善通寺」、130-131頁）。

鎌倉　佐保（共著）：戸川点編『平安時代はどんな時代か―摂関政治の実像』小径社、2023年。

苅米　一志（共著）：Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds.), Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650), Münster: LIT Verlag, 2024（担当箇所："Pastoral Care by Buddhist Temples in Medieval Japan," pp. 205-222）。

：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：総論）

川崎　剛志（共編著）：川崎剛志・時枝務・徳永誓子・長谷川賢二編『論集　修験道の歴史1　修験道の歴史とその組織』岩田書院、2023年。

（共編著）：川崎剛志・時枝務・徳永誓子・長谷川賢二編『論集　修験道の歴史2　修験道の文化史』岩田書院、2023年。

（共著）：大貫俊夫・赤江雄一・武田和久・苅米一志編『修道制と中世書物』八坂書房、2024年3月刊行予定（担当箇所：「聖地と日本仏教史の最創出―『金剛山縁起』の偽撰と受容」）。

小林　郁（共編著）：展示図録『ある伊勢御師の軌跡：新発見・橋村家伝来資料から』、皇學館大学佐川記念神道博物館、2023年10月2日（担当箇所：総論「伊勢御師橋村氏とその家伝資料」4-6頁、図版解説40件、56-62頁）。

：吉村利男・茂木陽一・千枝大志ほか編『"出入り" の地域史　求心・醸成・発信からみる三重』雄山閣出版、2023年（担当箇所：「中世後期における伊勢御師の様相：道者売券を中心に」）。

佐々木 守俊（共著）：宮治昭・肥田路美・板倉聖哲責任編集『アジア仏教美術論集　東アジアⅦ　アジアの中の日本』中央公論美術出版、2024年（担当箇所：「浄瑠璃寺吉祥天立像の「宋風」」、387-416頁）。

千枝　大志（共著）：地方史研究協議会編『"出入り" の地域史』雄山閣出版、2023年（担当箇所：「近世伊勢国における紙幣の存在形態と流通様相：山田羽書の発行構造と諸藩札の関係をめぐって」）。

（編著）：『街道今昔 三重の街道をいく』風媒社、2023年。

服部　光真（分担執筆）：元興寺文化財研究所編『菅原遺跡と大僧正行基』元興寺文化財研究所・元興寺、2023年、36-38頁、40-42頁、48頁、55頁。

藤本　誠（分担執筆）：佐々木虔一・笹生衛・菊地照夫編『古代の交通と神々の景観―港・坂・道』八木書店、2023年（担当：「地方から都を往来する人びと：地方豪族層・運脚夫を中心として」、367-390頁）。

守田　逸人（共編著）：『四国遍路関係史料集　古代・中世編』四国遍路関係資料調査研究会編、2024年。

湯浅　治久（共編著）：春田直紀編『列島の中世地下文書』勉誠社、2023年（担当箇所：「戦国期諏訪社の祭祀・造宮と先例管理」、80-93頁）。

●研究発表・講演

鎌倉　佐保：八王子市生涯学習センター講座「平安・鎌倉時代の武蔵武士：多摩郡西部を本拠にした武士団　武蔵七党、横山党について」八王子市生涯学習センタークリエイトホール、2023年7月2日。

苅米　一志："Entanglements in the Buddhism of Medieval Japan: Sects, Doctrines, and Pastoral Care," 'Entangled' Monasticism in Medieval and Early Modern Christianity: A Comparison with Medieval Japanese Buddhism, International Medieval Congress 2023, Leeds、2023年7月6日。

：徳永誓子『憑霊信仰と日本中世社会』（法藏館、2022年）合評会報告、岡山地方史研究会2023年12月例会、2023年12月17日。

川崎　剛志：院政期における大峯修行の盛行と儀礼化、Premodern Japanese Religion Workshop Seminar「中世日本における言葉、イメージ、儀礼の響き：日本宗教研究の方法論を考える」オンライン、2024年2月17日。

小林　郁：「伊勢御師の家政資料～橋村家を例に～」伊勢市郷土会、2023年10月20日。

：ギャラリートーク「ある伊勢御師の軌跡―新発見・橋村家伝来資料から―」皇學館大学佐川記念神道博物館、2023年10月21日。

：「家伝資料にみる伊勢御師～橋村一族の歴史と実態～」公益財団法人伊勢文化会議所（五十鈴塾）、2023年10月23日。

：「初公開！伊勢御師の家伝資料～橋村一族の軌跡～」三重県生涯学習センター（みえミュージアムセミナー 2023）、2023年11月3日。

："Ise Shrine and Onshi in Japanese Medieval period," Transcending the Tangibility and Intangibility : Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

：「中世における神宮御師形成の視点から」神道宗教學會第4回研究例会「伊勢神宮古代・中世移行期論の射程」、2024年2月22日。

：ギャラリートーク「ある伊勢御師の軌跡―新発見・橋村家伝来資料から―」、オンライン（神道博物館教養講座オンデマンド配信「伊勢御師の家伝資料を紐解く～橋村一族のすべて～」）、皇學館大学公式ホームページ生涯学習・公開講座専用フォーム、2024年2月26日～ 3月10日配信。

千枝　大志：Re-examination of the relationship between & "Yamada Hagaki（山田羽書）", Japan's oldest local currency- like private paper currency, and domain paper currency, 第2回ブルガリア貨幣学会議準備会、同朋大学仏教文化研究所、2023年6月3日。

：Re-examination of the relationship between & "Yamada Hagaki（山田羽書）", Japan's oldest local currency- like private paper currency, and domain paper currency, 10th Joint Meeting of ECFN and Nomisma.org & 2nd BulgNR TOGETHER, Sofia University, BULGARIA, 2023年6月20日。

：「絵図と古文書で読み解く名古屋の史的一断面 ～ヨソモノ宗教者からみた城下町の姿～」名古屋の旧町名の復活を目指す有志の会〈第131回例会〉、料亭蔦茂、2024年7月22日。

：「伊勢神宮地域をめぐる金融・信用と信仰経済」中世史研究会50周年記念大会「日本中世の東西と都鄙」②「都鄙の連関と相互認識」、名古屋大学、2023年9月26日。

：Yamada Hagaki（山田羽書）: An Investigation of Japan's Oldest Private Paper Currency a numismatic study of Japan's oldest private paper currency in the Tokugawa period、第112回経済史研究会 共通テーマ 近世日本の貨幣、大阪経済大学経済史研究所、2023年10月21日。

：「中近世伊予国における伊勢御師の活動―橋村家関係史料の紹介を中心に―」第2回中近世伊勢社会経済史研究会、松山大学樋又キャンパスH3C教室、2024年2月10日。

：「尾張藩札と山田羽書 ―貨幣金融史からみた伊勢と尾張の意外な関係―」名古屋の旧町名の復活を目指す有志の会〈第138回例会〉、札幌かに本家栄中央店、2024年2月17日。

藤本　誠："Temples and Dō in Ancient Japan: The Roles of Powerful Local Families and Village Elites in Local Buddhist Facilities," Princeton University, Center for Culture, Society and Religion, Workshop "Thinking Through Minshū Bukkyō: Popular Buddhism and the Study of Premodern Japan"（Princeton University）、2023年9月22日。

：「古代地方寺院をめぐる諸問題」東国古代遺跡研究会第13回研究大会「東国の地域交流と平安仏教―南東北と北関東の里の寺、山の寺―」2023年11月12日。

："Statues and Sermons in the Local Community: Media Used by Buddhist Priests from the Capital in Ancient Japan," Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia, Tokyo Metropolitan University、2023年11月25日。

：「古代地方寺院の特質」早稲田古代史研究会例会報告、2024年1月20日。

守田　逸人：「香川大学図書館「神原文庫」と初代学長神原甚造の人物像」神原文庫資料展関連講演、2023年7月11日。

：「善通寺と善通寺地域一帯をとりまく弘法大師の足跡」愛媛大学文系研究センター合同シンポジウム、2023年9月24日。

：「讃岐地域の荘園形成と弘法大師「聖跡」の広がり」香川県高校歴史部会研究会講演会、2023年10月26日。

2023年度業績一覧

：「一次史料出現期の札所寺院について」愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター公開講演会・シンポジウム「弘法大師生誕1250年代・中世の四国遍路」2023年10月28日。

湯浅　治久：「戦国仏教と中世社会―寺社の連合と災害対応から考える―」中近世宗教史研究会10月例会、2023年10月20日。

：「中国仏教説話（六朝隋唐期）の疾病（障害）関係史料目録」『障害史研究』6号（障害史関連データ集）、2024年、1-14頁。

：「古代日本仏教説話の疾病（障害）関係史料目録」『障害史研究』6号（障害史関連データ集）、2024年、15-36頁。

●短報・書評・アウトリーチなど

苅米　一志：「書評と紹介　中澤克昭著『狩猟と権力』」『日本歴史』906号、2023年、97-99頁。

：「書評　中澤克昭著『狩猟と権力』」『上智史学』68号、2023年、139-144頁。

小林　　郁：「初公開！伊勢御師の家伝資料」『神社新報』第3646号、2023年8月14日。

：企画展「ある伊勢御師の軌跡―新発見・橋村家伝来資料から―」皇學館大学佐川記念神道博物館2階第2展示室、2023年10月2日～ 11月30日。

：パネル展示「ある伊勢御師の軌跡―新発見・橋村家伝来資料から―」三重県生涯学習センター1階エントランス、2023年11月1日～ 16日。

：「新刊紹介：窪寺恭秀著『伊勢御師と宇治山田の学問』」『皇學館史學』39号、2024年、印刷中。

鎌倉　佐保：「荘園の基礎知識」『地歴最新資料』32号、2023年、11-16頁。

千枝　大志：「2023年度現地で学ぶセミナー　伊勢国の仏教文化と街道文化―三重の街道をゆく―」同朋大学仏教文化研究所、2023年11月23日。

：「【伊勢の歩き方】歴史学者と行く！観光地とは一味違うディープ伊勢ツアー《河崎編》～伊勢の台所と呼ばれ信長・秀吉・家康も重要視した物資の物流拠点から伊勢のまちを見る～」大ナゴヤツアーズ、2024年1月21日。

湯浅　治久：「書評　高木純一著『中世後期の京郊荘園村落』」『日本史研究』733号、2023年、43-50頁。

学術変革領域研究（B）2020 ～ 2022年度
「中近世における宗教運動とメディア・世界認識・社会統合」

ReMo研　ニューズレター　第3号

2024年3月　発行

発行人　大貫 俊夫
発行所　東京都立大学人文社会学部
〒192-0397　東京都八王子市南大沢1-1
TEL：042-677-2109
E-mail：ohnuki@tmu.ac.jp

領域ホームページ
https://religious-movements.com/